

【史料5】

柿本人丸（運歩色葉集）

△京都大学付属図書館所蔵本

柿本人丸一者在石見、持統天皇問曰、タイスル対レ丸者誰、答

曰人也、依之、曰人丸ハママ大大長四年丁未、於二

石見国高津ニ一死、末后一句曰レ留ニ跡ヲ高津浦

ニ一、吟残、島、隠、船、心須真面目、広劫、

以前先、又、哥曰石見ナル高津ノ松ノ木之マニ

テ浮世之月ヲ見ハテヌル哉、文武・大宝元年

辛丑三月廿一日於二明石浦一詠歌、至天文

十六
○丁未八百四十七年也、

又説、聖武天皇神亀元甲子三月十八日

至天文十六丁未八百廿四年也、

○「運歩色葉集」の成立は、天文一六〇一七年頃と推定されて
いるため、しばらくここに収める。また「運歩色葉集」につ
いては、静嘉堂本・天正十七年本・西來寺本の諸本があり、
若干記載に異同がある。

【史料6】

九州道の記

天正一五年
五月七日条

△『群書類従』卷三三八

七日。浜田を出て行に、高角といふ所なりと云を舟より見
やりて。石見かたかつの松の木間よりうき世の月をみは
てぬるかなと人丸（柿本人麿）の詠ぜしことおもひ出て。

移り行世々をへぬれと朽もせぬ

名こそ高つの松のことは

とかくして長門国にいたり。（下略）

【史料7】

衆妙集・雑部下

△続々群書類従第一四

慶長二年、昌山御（足利義昭）不例のよし聞て、八月十五夜よふね

にて大坂へくたりけるに、三嶋江に舟をとめ蘆間の

月をなかめて

たれか又こよひの月をみしま江の

芦のしのひに物おもふらん

廿四日、きもつきよりめくりといふ所までつきて、大

安寺に泊りけるに、夕月夜おかしくさしうつるを見て

はるくと山をめぐりの夕月夜

にしに入江の影をみる哉

廿五日、益田へ舟をよせて、たかつの人丸御影堂尋て

まかり拝奉りて、旅宿に帰曉かたにおもひよりける

あふきみんなかつの松の木の間より

むかしをのこす

赤石の岡たつねてみ侍しに、松の木立ふりたるをむか

しのあとゝ里人のをしへ侍へれば

夕日影あかしのをかの跡とへは

昔おほゆる松かせそふく

（下略）

○時系列や移動経路に不自然な点があり、錯簡があるか。